
装甲戦士クライマン

河野 将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

装甲戦士クライマン

【Nコード】

N8265L

【作者名】

河野 將軍

【あらすじ】

風螺 玄紅（フウラ ゲンク）は冴えない大学生である。ある日、謎の少女から力を受け取り、悪人共と戦う事になった彼は、日夜正義と身の安全の為に戦うのだ！！

序章・汚い部屋の中心で何かを叫ぶ（前書き）

『ネコマタとマイちゃん』と同時進行で創った二つ目の連載作品です。自分は特撮物が好きなので、カッコイイヒーローを創れたらいいな〜なんて考えてたりします。文章がかなり汚いと思います
がどうぞ、よろしく願います。

あと、こっちの更新は少し遅いと思いますので、スイマセン。

序章・汚い部屋の中心で何かを叫ぶ

ふと、窓越しに外を見る。

八時を過ぎて暗くなったそこには、カップルや家族が手を繋ぎ、仲良く歩いていた。

その顔はとても幸せに満ち溢れていて、アパートの二階から見下ろす僕なんて関係なく笑っていた。

まるで、僕がこの世に居ても居なくても、関係ないように笑っていた。

「……………はあ」

バイトを転々とする冴えない大学生の僕に、もちろん彼女が出来る訳も無い。家族とも不仲で、一人暮らしを始めてから一度も連絡をとってない。

きつと僕は…いや、間違いなく僕はダメ人間だ。分かっているけどどうにもならないけど…。

「……………バイト、どうしようかな」

ボソツ、と。汚い部屋の真ん中で独り言を呟く。

今日、僕はバイトを二週間でクビにされた。理由は、コンビニでレジ打ちをしていたが、何時まで経っても仕事が遅い、覚えが悪い、ただそれだけ。

「…sonだけでクビとか……………ありえないよ」

ねっころがり、誰に言うでもなくぼやいた。…最近は何言が多くてダメだな。

…とりあえず、電気を点けよう。あと、カップ麺醤油味を食べて、大学のレポートをまとめて、そうだ！今日は見たい深夜アニメがあった！後は……………寝るか。

「……楽しくない」

こんな変化の無い日々が続けばそりゃあ飽きるよな……。昔はもつと楽しいなキャンパスライフを夢見たはずだったのに。

小学生の頃は未来なんて、僕の想像にも及ばない未知の世界だったのに、知ってしまったらなんてこともなかった。それは、欲しかった物をやっと手に入れて、でも箱を開ければ期待ハズレで、時が経てば興味を無くす感覚。それに近い。

そんなちよつとブルーな気分の時、僕は不意に何かを思い出した。「……何かに……なりたかったはず……」

大学の経済学部にいる僕だが、昔……そう、幼稚園児だった時、僕はあれになりたかった。

誰にも負けない、無敵のヒーロー。

テレビやビデオの中で、悪の組織が差し向けた怪人共を崖の上に颯爽と現れ、変身の掛け声と共に姿を変える戦士がやつつける。そんな正義の味方に昔の僕は憧れた。何時か僕も変身出来るようになると信じてた。

でも、いくら待っても変身出来るようにはならなかった。いつの間にかそんな夢さえ忘れてしまった……。

「……ふう」

思考を停止し、バネが軋むベッドに身を委ねる。わずかに体が弾み、そしてゆっくり沈み始める。周りは静かですぐに寝れそうだ。

あ、寝たらアニメ見れないや。テレビ点けとこ。

「……あゝああ、何か起きないかなー」

と、この後何かが起きるフラグが立つように言ったりした。もちろん返事はない。

「……ホントに……楽しくないよ……」

独り言を連発する僕。誰かが同情してくれるはずなのに……。いや、同情してもらいたいのかな？

まあいいや。どうせこの日常が変わる訳じゃないし…。あ、これもフラグっぽいな。

「……あれ？こんなドラマやってたっけ？」

ベッドで寝転びながらテレビを見ると、そこには可愛らしい少女の胸から上までがアップで映っていた。

金髪のワンレンでかなり現実離れた服を着ている。アニメから抜け出したような姿に綺麗な顔だった。見た感じ歳は十五、六かな？

…知らない女優だ。てか子役？

「……動かないな」

テレビの少女は一時停止しているように動かず、ジーツとしかめっ面で前を見ているだけだった。

…なんか、僕を見つめてるようで恥ずかしいんだけど…。

「ちよつと！その貴方！」

「お、喋った」

やっと話が進むのかな？

「喋るに決まってるでしょが！いいから、もうちよつとちよち来い」
共演者は誰だろ？ブーム的に嵐の誰かな？さっきから金髪の女の子のアップしか映らないけど。

「貴方の事よ！とつととこつちに来なさいつたら！！」

「……あ、ラーメン作らなきゃ」

「無〜視〜す〜ん〜な〜！！早く来なさいよ、風螺 玄紅（フウラ ゲンク）！！」

……ん？俺の名前？

「……ああ！同姓同名……！！」

「こんな名前貴方しかないでしょが！」

……んん？？返事した？

「……いや、いやいやいや、これで反応したらやっぱりテレビでした
と言うオチに決まってる。僕はそんな恥ずかしい事はしないぞ」

「とつとと来なさい！冴えない彼女いない歴〃年齢で童貞大学生の

風螺 玄紅ウウツ!!」

え？

「ええ？」

ベッドから起き上がり、テレビに近づぐ。

「そろそろ、最初からそうしなさい！まったく……」

「……………」

「で、いきなりだけど落ち着いて聞いて……あの、もしもし？」

「……………信じられない」

「はい？」

「僕の日常に変化が来た」

夢じゃないよな？夢じゃないんだよな？凄い、フラグを立てていてよかった！

「ん〜、まあいいわ！じゃあ用件だけど……」

「う、うん！」

ガシツ！とテレビにしがみつくように顔を近づける。

「ちょ、近。つ、つまり……ザツ……がね、」

と、何故か突然ノイズが聞こえた。

「悪い……ザツザツ……で、怪……ザザツ……変しザツ……てもらっ……ザツ

……ザザツ……ザツ……様代行……ザツ」

「な、何！？聞こえないぞ!？」

まずい、まったく聞き取れない。これじゃあ僕はこの日常から抜け出せない！

「……ザツ……よ、電波が悪……ザザツ……仕方ないからザツ……また今度にするわ!」

「こ、今度？」

「そつ、今度よ!……ザツとりあえず、今日の所は……」

そして、少女は僕に向かって微笑んだ。その笑顔に、僕は何故か泣きそうになった。

「全部、夢って事にしなさい！」

そして、僕の見る世界が逆転し、目の前が真っ暗になった。

「あれ？」

気が付くと、僕はベッドの上で俯せに寝ていた。窓から光りが入ってくるって事は、今は朝なのか？てか…

「…女の子は？フラグは？え？」

まさか、全部夢か！？

「う、うわあああああ！！！」

ヤバい！恥ずかし過ぎる！あんな中二病みたいな夢を見るなんて！

「あああ！恥ずかしい！もうやだ！」

仕方ない、全部忘れよう。無かった事にしよう。とりあえず大学に…。

「…あ、レポート」

まとめてない…。

「……………楽しくないぞ」

とにかく、これが僕の日常。そして、これからが僕の非日常。少女が言っていた「また今度」と言う言葉の意味を理解するのは、それほど遅くなかった。

序章・汚い部屋の中心で何かを叫ぶ（後書き）

謎の少女がまたも現れ混乱する玄紅。説明もなく連れて行かれたのは名も知れぬ街。月夜が照らすビルの屋上で、玄紅は叫ぶ！！

「家に帰りたいああいいッ！！」

「違うでしょ！変身よ変身！！」

次回もお楽しみ下さい！

1・再開した（前書き）

前回までのあらすじ！

主人公は寂しい奴だった！！

1・再開した

日曜日。アパートから何処にも出かけず、朝から晩までずっと大学の課題を黙々とやる僕、風螺 玄紅（フウラ ゲンク）です。

遊びに誘われる事もないので仕方なく、扇風機を強に設定し、整理整頓されてない部屋でひたすら作業に勤しむ。実に楽しくない…。

「暑い…暑い…熱い…厚い…篤い…アツイ…」

いけない、また独り言喋ってる。もう癖になってるのかも…。

そういえば独り言が増え始めたのは大学に入ってから、つまり一人暮らしを始めた頃からだったような気がする。この癖は寂しさから来ているのか。それとも別の…まあ、考えても答えはでない。僕は仕方なく精一杯このつまらない生活を続けるだけだ。

つまらないとは言ってはいるが、人付き合いが悪く、友達と呼べる相手も少ないからつまらないのは当たり前なのだが、かろうじて唯一楽しいと感じられるのはサークル活動。こう見えてテニスをしたりしている。まあそれでモテる訳無かったけど…。

サークル活動以外には特に何も感じない。一人暮らしも少々飽きてきたし、ドラマやアニメとかのテレビ番組も最近は僕好みの物はない。

……………テレビ。

……………テレビ？

ドンドンドンッ！…ドンドンドンッ！

ドアを激しく叩く音が響く。

「…？ はい！」

大家さん？ 押し売り？ こんな時間に人が来るのは珍しかった。まあどっちにしろ、早く課題を終わらせたいから適当に話して作業

を再開しよう。

「久しぶりね、風螺 玄紅（フウラ ゲンク）！ 一ヶ月ぶりぐらいだけど貴方は私を覚えてるかしら？」

「……いや全然？ 全く知らないので新手のセールスならお断りします。ではでは」

玄関の前に変な金髪少女がいたのでドアを閉めた。終わり。先生の次回作にご期待下さい。

「ちょ、ちょっち待ちなさい！ あれだけ斬新かつインパクトのあるされど甘酸っぱさを秘めた出会いを忘れたの！？」

と思っいたらこじ開けようとドアにつかみ掛かってきた。

「甘酸っぱさは無かったと思うけど……」

「ふっ、墓穴を掘ったわね！ やっぱり覚えてるじゃない！ 何だかんだ言っちゃって私のこと忘れられないんでしょ！？」

「別れた彼女みたいに言うなッ！」

「貴方は彼女持ち経験ないでしょが！！」

「ただ今絶賛募集中です！！」

「だったら好きな人ぐらい作ったらどう！？ どうせ妄想でしか女の子と喋ったりチョコメチョコメしたりしないんでしょ？」

「好きな人ぐらいいるっての！ 近くのファミレスで働いてる茶髪の子がだなあ……て、何言っただ僕！！」

焦りすぎの僕である……。

「だからもう…あんまり騒ぐと大家さんが…！」

「知ったこっちゃないわ！ さつさと入れなさい！」

こじ開けてくるのを必死に止める僕。

記憶が間違っただけならば、この金髪少女は僕の夢に出て来た子だ。実際は本当に忘れていたのだが、顔を見た時にあの恥ずかしい夢を思い出す事が出来た。

内心かなり驚いてはいるが、不思議と冷静でいられた。それどころか、異性と普通に喋ってることに一番驚いた。大の仲良しのように。まともに異性と喋る事が出来るのは母親が大家さんぐらいなのに…。

「わかった、合言葉ね！ 合言葉が必要なのね！」

「そんなの無いから…」

「『そんなの無いから』…待ちなさい。それは一度解読した暗号に似ているからすぐわかるわ」

聞いてちやいなえ…。

そして、しばらく玄関で言い合っていると、

カツ、カツ、カツ、

と。誰かが階段を上る音が聞こえた。

「ヤバイ…ヤバイ！」

「え、何？」

しまった、騒ぎすぎた！ このままでは皮を剥がされる！

気が動転する僕に容赦なく、その人は現れた。

「五月蠅い。日曜日の夜遅くに騒ぐな。ぶち殺す」

アパートの大家さんが階段から上がって来た。

「ひっ…！」

黒髪の若い綺麗な女性だけど、常に殺意を振り撒くような怖い人。正直苦手だ…。

「すいません。死ぬ程すいません。すぐに黙らせるんで許して下さいさ

い

「そうか。ならその子を入れてやれ。女の子を外で待たすのは男として情けないぞ」

「そうそう！ ではお言葉に甘えてお邪魔」

金髪少女はスリリと中に、滑り込むように部屋へ入っていった。

「あ、おいつて！」

「次、大声出してみる。削ぎ落とす」

「……………はい。すみません」

……………なんか、楽しくないな…。

「うん、市販のグレープジュースにしては美味しいわね！ でも今度からはワインを所望するわ。ブルゴーニュとか」

「借金する事になるわ……………」

勝手に冷蔵庫から出しやがってコノヤロウ。

入られたのはもう仕方がないので適当に部屋を片付け、小さいテーブルを挟み、向かい合うようにフローリングの床に座った。少女も大人しく正座している。

…それにしても、ゲームから飛び出したような金髪少女がフローリングの床の上に正座してペットボトルのジュースを飲んでる。…かなりシユールだなあ。

「…君、見た感じ外人だよな？」

「ん？ うん、てゆうかハーフかな？ まあ日本産だけど」

「日本産って…」

女の子がそんな事言うなよ…。

不思議な子だった。少女の長い金髪も気になったが、特に気になったのは服装。白いワンピースに見えるが綺麗で上質な布だし、所々に金色の豪華な刺繍が施されている。服に興味感心のない僕でさえその服の価値がわかる。

「さて、まず貴方に受け取って欲しい物があるんだけど」

「え？ いや、待てよ。まず君が誰かを説明して欲しいんだけど…」

「え？ 仕方がないわね…。じゃあ名前から」

何でめんどくさそうなんだよ！？ めんどくさいの僕う！！

少女はペットボトルをテーブルに置き、立ち上がる。

「改めましてお久しぶり。私の名前はイルナチエア。イルナチエア・カルマよ！ 親しく呼びたいならイルナと呼びなさい！」

長い金色の髪を揺らし、少女は誇らしげに名乗った。

…やっぱり外国人か。でも僕に何の用が…

「人間とエルフのハーフだから耳もそんなに尖ってないし魔力もちつとしかないけど、立派なエルフ族の一人よ」

……………。

「しかも、私はあの有名な妖精貴族、カルマ家の一人娘！ ふっふっふっ、驚いたかあ」

「ああ、驚いた。現実とゲームの世界を区別出来ない人間って外国にも居たんだ」

「違うから！ 区別出来るし現実だから！」

リアルRPG少女は顔を真っ赤にし、必死に否定した。

「キャラになりきるのはいいけど、髪を染めてまでなりきるのはお母さんが泣くと思うよ？」

「ちーがー！ 本当だったら本当なの！！」

「ほら帰りなさい。僕これから課題を片付けないといけないし…、何なら君の家に電話して迎えに来てもらう？ 番号は？」

「電話は無いよ？ 家は富士の樹海から通って行くの」

「富士の樹海に住むエルフなんて聞いた事ねえよッ！！」
より胡散臭くなったな。どうしょ…。」

「信じられないならあれ、私がテレビを使って一ヶ月前に会いに行つたじゃない？ あんな手の込んだ会い方エルフにしか出来ないわ！」

「人間にも出来るっちゃ出来るのでは？」

それなりの機材は必要だけど…。」

「樹海から直接電波を飛ばしたのに通信が途切れた時は焦ったわホント」

「富士から飛ばしたの！？ ってか、やっぱり夢じゃなかったって事なのか？」

だからって彼女がエルフだと決まった訳じゃないけどさ。はあ…。」

悩んだ挙げ句、僕は彼女…イルナチエアの話を書く事にした。話が終われば気が済んで勝手に帰るだろう。イルナチエアは何故か立つたまま話を続ける。

「しつかりと話を聞きなさい」

「で、そのエルフ族の君の御用件は？」

「うん。実は今、私達エルフ族は絶滅の危機に陥っているの。原因は同族達の反乱。彼らは少数人だけど、それぞれ強力な力を持って私達を圧倒したわ。この事態に生き残りのエルフ族の皆とエルフの族長は敵を殲滅すべく…。」何で頭抱えてるの？」

「いや…。」予想以上に重症だなんて…。」

そんな一気に言われても信じられねえよ…。」いや信じたとしても理解出来ねえよ…。」

「これは真面目な話なのよ玄紅！ しつかりと聞いて欲しいの！」
と、言われましたも…。」てちよつと待て！

「おい、何で僕の名前知ってるんだ！？ 名乗った記憶は無いぞ！」
「言ってなかつたっけ？ それこそ単純な話、貴方の身元をちつと

調べたの」

イルナチエアは平然と言った。当然、啞然とする僕。

「調べた…？ 何でまた…」

「事前調査よ。これから協力してもらおう人間なんだから、多少身元とか人柄とか知っていた方がいいでしょ？ とどのつまり…」

協力？ まさか、一緒に戦ってくれ的なお約束パターンなの

「一緒に戦って欲しいのよ」

か……。

「……………マジで？」

「生身で戦ってなんて酷な事は言わないわ。私達が用意した装備を受け取って、それで戦って欲しいの」

渡したい物ってそれか…。いやでも、

「そ、そんな馬鹿な！？ 漫画じゃあるまいし、武器とか防具とか渡されたって戦えないよ！」

運動は自信があるけど、喧嘩すら一度もした事がないのに戦えないって無茶だ！ 本気じゃないよな！？

イルナチエアはそんな僕の弱音を聞き、みるみると顔から笑顔が消えていった。そして、

「…あー、まあそんな事言わずに。何ていうかそのお……………協力して下さい、お願いします」

イルナチエアは一步退いて正座しなおし、頭を下げ、両手を床に置く。

五体当地、土下座の姿勢。

「頼れるのは貴方しかいないの。お願いします」

声も身体も震えている。懇願する人間を、僕は初めて見た。

「え！？ いや…おい、頭上げるよ…！」

立ち上がって戸惑う僕。どうすればいいんだ！？ このままだと泣かせてしまいそうだ…てか泣いてる！？

「わ、わかったわかった！ とりあえず話し聞くから泣くな！ な？」

「じゃあまずこれを見て」

スツと顔を上げ、笑顔で背中に手を回して何かを取り出す。

「……古い手を使いやがって。」

「これは、私達エルフ族の錬成技術を一点に集めて造りだした『鎧』。究極と言っても過言ではないわ。これを着て、戦ってほしいの」

「おお…？」

『究極の鎧』……………。

今度こそ夢ではないのなら、僕はその鎧を着て戦う事になるのか……。勿論まだ信じてるわけじゃないけど、なぜだろう…期待してしまっ……。子供の時から憧れていた正義の味方…もしそれが出来るなら僕は…！

「さあ、受け取りなさい！ サイズもバッチリ。軽量化済み。カラーリングは正義と神聖さを表すホワイト。身体をぴっちりと包み込むフィット感。手軽でスムーズなチャック式装着方。畳んでもシワが付きにくい。水洗い可能。伸縮性バツグンのこの『究極の鎧』をッ…！」

「ただの全身タイツじゃねえかああアアアアアアッ！！！」

確かにシワは付いてませんでした。

¥ \$

「ちょ、ちよつち！ 閉め出す事無いじゃない！」

「いいから帰れって！ もう暗いぞ！」

これ以上話しても無駄だ。この子を家に強制送還させねば…。

無理矢理外に放り出したイルナチエアがドア越しにワンワン叫ぶ。

「いい、これだけは言っておくわ！ 敵が攻めて来るのは明日の晩

よ！ 狙いはまだ不明だけど、仲間の調べでは必ずこの街に来るわ

！ その為に早くこの『究極の鎧』を着て！」

「だから、それただの全身タイツだってば！ てか狙い不明って何

だよ！？ …期待した僕が馬鹿だった」

「とにかく、明日の朝また会いに行くわ！ その時は覚悟決めなさ

い！ じゃあね！」

ドタドタと足音が遠ざかる。帰ってくれたようだ。

「……………はあ」

まあ、これはしょうがないよな？ 間違いなくあの子が悪いし、僕

はただ「それは全身タイツです」って言ったただけだ。

…なのに何で罪悪感があるんだろ。

ドンドンッ！

「……………しつこい」

前言撤回。罪悪感無し！ ドアに向けてもう一度怒鳴る。

「だからもう帰れって！ もう話しに付き合ってられ」

「ほう、このワタシに帰れと？」

大家さんの声だった。

「カひゅツ！??」

「お前の帰る場所を無くしてやってもいいんだぞ？」

ドア越しにでも殺意が滲み出ているのが視える…。

異界の扉を開かんとするかのように如くそつとドアを手前に引く。やは

りそこには異界の生き…もとい、大家さんがいた。拳を握りしめな

がら…。

「えと、あの、その、あ、… あがります？」

「いや、臭いがるから立ったままでいい」

「どういう意味！？ 僕の部屋の臭いがつてこと！？」

「…君の彼女、暗い中たった一人で走って行ったぞ？ 追いかけていいの？」

「彼女じゃありません！ …別にいいんですよ。僕には関係ないですし」

「そうか……」

立ったまま腕組みをする大家さんは、いつも以上に神妙な顔つきだった。そして、口を開く。

「あの子が泣いていたのに関係ないか」

「……………え？」

「まさか、イルナチエアが！？」

「名は知らん。だが、階段ですれ違った時確かに涙を流していた」
「追い出されたのがそれほどショックだったのか？ いやしかし、

「だ、大丈夫ですよ。あいつ嘘泣きが得意なんです。つつか、あの子の話自体が無茶苦茶ですよ」

「そつだ！ さつきも嘘泣きして騙したじゃないか！ おおかた周りに同情を求めて」

「本当に嘘か？」

「…はい？」

大家さんは撒き散らす殺意を、僕一点に集めるように静かに怒っていた。

「君はあの子の顔を見て、あの子の感情を察して、嘘泣きをしていると、嘘をついたと決め付けたのか？」

「……………あ……」

僕は一度たりとも、イルナチエアの顔を、瞳を視ていない。

「無茶苦茶だの言う前に、ちゃんと話を聞いてやることも出来ない

のか君は。聞いてやるだけでも、少しは気が楽になっただろうに……」

頼れるのは貴方しかないの。お願いします

……彼女は声も身体も震えていたじゃないか。もしあれが、演技じやなかったとしたら。僕が馬鹿馬鹿しいく思っても、彼女は真剣に悩んでいた事に代わりなかったら……。

「……君は初めて会った時からそうだったが、少々他人を自分から遠ざけ過ぎているな。そろそろ他人を察してやる事なり、信頼してやる事なりを覚えたらどうだ。君はもうガキではないだろ？」

つまらないから関わらない。

くだらないから察しない。

楽しくないから近づかない。

まるで子供のままだ。駄々をこねる幼い子供だ。「……僕を、本当に……頼りにしてくれてんだ」

初めて頼られたのに、僕はくだらないと拒否してしまった。僕は、ただのクソガキだ……。それが死ぬほど恥ずかしい。

「……僕はまだもう口を開く事すらせず、ただ下を向いて突っ立っただけしか出来なかった。

「……ガキならガキらしく、悪い事したら謝ればいい」

「……え？」

俯く僕に、大家さんは言った。

「君のご両親は教えてくれなかったのか？ 一言、『ごめんなさい』と言えばいい。酷い事をしたなら、それについてしっかり頭を下げるべきだ」

はつきりと、優しく助言をくれた。氣遣ってくれたと受け取っていいのか…？ でも、

「でも、彼女が何処に行ったかも、わかりません…」
もう手遅れだ。謝ろうとしても、謝る相手の居場所がわからない。もう会えない…。

「何だ、その全てが終わったような顔は？ 一生会えないと決まったわけではないだろ。…まあ心配いらない。おおよその見当は付いている」

「…？」

え？ 大家さん、イルナチエアを知ってるのか？

「あの子の移動速度と向かった方向、日時と交通状況、あの子のおよその心境と心理、そしてアタシの“勘”からして、今から走って行けば、ここから右の道へ曲がって真っ直ぐに10分程行くと到着するカヤノキ公園の正面口手前あたりにいるはずだ」

サラサラと紡いだ言葉には確信しているような凄みがあった。そして、僕はやっと、目の前の腕組みしている女性が誰かを思い出した。

「……あゝ、そうでした。流石、『私立名探偵』の欺霧 鷗（アザキリ カモメ）さんだ」

「『元・私立探偵』、だよ。勘は鈍ってはいないと思うが、はずれたらすまない」

いや、大家さんの言う事ならそうなんだろう。

大家さんの推理（大家さん自身はただの勘だと言いはっているが）は確実に当たる。実際、数々の難事件を、まさに小説や漫画の名探偵のように見事全て解決してきたらしい。詳しくは知らないが…。

大家さんに言われてやっとわかった。僕がしなきゃいけないことを！

「…僕、謝ってきます。信じられないけど。力になれないけど。信じられなくてゴメンって。力になれなくてゴメンって！」

そうだ、あんなさよならはダメだ！ 謝ってどうにかなる訳じゃ

無いけど、それじゃあ何時までも他人に近づけない！

「ありがとうございます！ ちよつと謝ってきますー！」

「ああ、行ってこい。謝って、また頑張れ」

僕はもう一度大家さんに感謝し、すぐに走り始めた。

* * *

僕は、僕を含めた人間という生物が嫌いだった。

心、心境、感情、思考、思惑、エトセトラエトセトラ。まるで視る事が出来ないじゃないか。自分の場合もそうだ。感情は制御出来ないし、無意識に思考を始める。視えない事が一番の恐怖だ。だから僕は思った。

嗚呼、何て気味の悪い生き物だろう

僕は他人を遠ざけ、自分を現実から遠ざけた。自分の心を殺し、この日常をただ無駄に過ごす。楽しくないのは当たり前。だって、自ら現実を、無理矢理退屈にしているのだから…。

だから、もうやめよう…。

遠ざけるのはもうやめだ。現実を引き戻そう。他人に近づこう。

そのために……、

「ハア…ハア…ハア…この先か？」

彼女に…イルナチエア・カルマに謝らないと！

必死にイルナチエアを捜す。適当な服装だが勿論身だしなみを整える暇はない。上下が揃ってない半袖半ズボンで走る。

「ぜえ…はあ…ぜえ…あ！」

街から少し外れ、街灯しか明かりのない道でカヤノキ公園らしき場所を見つけた。その出入口付近に、僕にでも価値がわかる程の、綺麗で価値の高そうな服を着た少女が立っていた。大家さん大当り。

「イルナ！！」

思わずイルナチエアをそう呼んでしまった。親しく呼びたい時と言われていたが、泣いているイルナチエアにそれはまずかったか？ いや、それよりも、

「ちよつと待って！」

呼び止める僕に長い金髪の少女が振り返る。間違いなくイルナだった。自然と足が速くなる。そして、僕は勇気を持って、イルナの泣いているであろうその顔をしっかりと見た。

「さっきはゴメン！ まだ怒ってると思うけども」

しかし、イルナの顔は泣き顔でも怒り顔でもなく、その表情は、

「こ…来ないで！！ 危ないッ！！」

真っ青に青ざめていた。

「あ…え！？ 何で…？」

そんなに拒絶しなくても…、てか危ないって？

「あちゃー、しまったしまった。人間に見つかったなあ。やっぱり早めに来たのが失敗だったよ」

そして、僕はやっとイルナの後ろに誰か居たのに気づいた。

「イルナチエアさーん、もしかしてもしかしたらもしかすると、お

前らの切り札ってあの人間のこと？」

「ぐっ……玄紅、早く逃げて！ コイツは」

「無視はよろしくないなあ……。それに、自己紹介は自分でするよ」
街灯の明かりがその巨体の男の長く尖った耳を照らし出す。あまりに突然すぎて、僕は逃げることを忘れていた。

「人間……じゃ、……ない？」

「御名答！ 俺はエルフ。しかも反乱軍、通称『十二ノ詞（トウエルブズペル）』の一人、拳闘「ナツクル」って者でさあ。ちなみに、名前がナツクルってことね。ってなわけで！」

そいつは、僕の敵は、ニタニタと笑って言った。

「君を殺しちゃうけど仲良くしてね、切り札君」

つづく！

1・再開した（後書き）

結局予告詐欺に終わった今回。今度こそ出るか、一撃必殺技！！

「俺の拳が真つ赤に燃えるううう！！」

「それパクリだから！！」

次回もご期待下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8265/>

装甲戦士クライマン

2010年10月8日14時11分発行